

桜井市

～積極的に「新しい人の流れ」を生み出しまちの賑わいをつくる～

奈良県中部に所在する桜井市は、^{まきむく}纏向遺跡や^{おおみわ}大神神社、^{はせでら}長谷寺等、歴史文化資源に恵まれたまちです。同市は現在、中心市街地の賑わいづくりや地場産業の活性化等、県内他市町村に共通する様々な課題を抱えています。こうした中、同市は積極的に「新しい人の流れ」を生み出し、まちの賑わいをつくることで課題解決を図っており、以下にその主な取り組みを紹介します。

I 概要

1. 地理・歴史

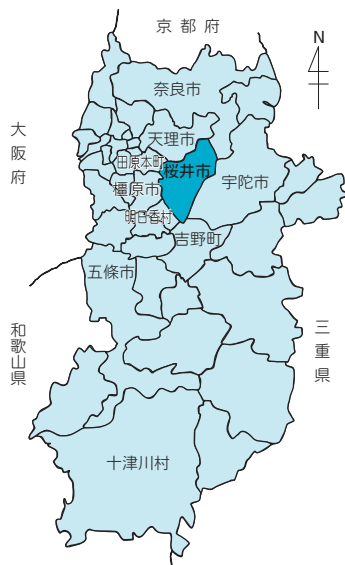
奈良県中部に所在する桜井市は、人口 57,244 人（県内 8 位）、世帯数 21,672 世帯（同 8 位）、面積 98.91km²（同 11 位）の市である（総務省「国勢調査 人口等基本集計」（2015 年））。

市中心部の桜井駅は近鉄大阪線・JR 桜井線（万葉まほろば線）が通り、大阪上本町駅まで近鉄線の急行で約 45 分。また主要道路として市中心部と北部をつなぐ国道 169 号線、東西の中和幹線（県道 105 号線）・国道 165 号線等がある。

同市は 1956（昭和 31）年に市制施行後、^{かみの}上之郷村、^{はせ}初瀬町、^{おおみわ}大三輪町との合併等を経て現在の市域を形成。昨年、市制施行 60 周年の節目を迎えた。

邪馬台国畿内説における有力候補地・^{まきむく}纏向遺跡や日本最古級の神社である^{おおみわ}大神神社、「源氏物語」や「枕草子」等の古典文学作品にも描かれた^{はせでら}総本山長谷寺が所在する等、歴史文化資源に恵まれたまちである。

桜井市の位置図



2. 産業構造

従業地による就業者人口（15 歳以上）の産業別割合は、第 1 次産業が 3.8%、第 2 次産業が 25.1%、第 3 次産業が 71.1%である（総務省「国勢調査 従業地・通学地による職業等集計」（2010 年））。奈良県全体（各 3.5%、23.1%、73.4%）に比べ第 2 次産業の割合がやや高い反面、第 3 次産業がやや低く、全国平均（各 4.2%、25.2%、70.6%）に近似した構造となっている。

農業経営体数（経営耕地面積 30a 以上または一定規模以上の事業者数）は 654 経営体（県内 7 位）、経営耕地総面積は 519ha（同 8 位）である（農林水産省「農林業センサス」（2015 年））。

製造業の製造品出荷額等（従業者 4 人以上）は 466 億円（県内 12 位）で、うち「食料品製造業」（259 億円）が高いシェアを占め、「木材・木製品製造業（家具を除く）」（37 億円）、「金属製品製造業」（30 億円）が続く（経済産業省「工業統計表 市区町村編」（2014 年））。同市は^{みわそうめん}三輪素麺の産地として有名であり、また木材関連産業が集積している。地域経済を支えるこれらの地場産業には、時代に応じた変革を遂げ、産業としての魅力をさらに高めることが期待される。

民営事業所数は 2,523 か所（県内 6 位）で、従業者数は 17,950 人（同 7 位）である（経済産業省「経済センサス 基礎調査（2014 年）」）。産業中分類別に従業者数を見ると「医療業」（1,654 人）が最も多く、「社会保険・社会福祉・介護事業」（1,547 人）、「飲食料品小売業」（1,323 人）

と続く。

3. 人口構造

昼夜間人口比率は87.5%（県内24位）と100%を下回り、ベッドタウンの傾向を示している（総務省「国勢調査」（2010年））。

年齢階級別人口割合は、15歳未満が12.3%（県内11位）、15～64歳が59.0%（同11位）、65歳以上が28.7%（同30位）であり、奈良県平均（各12.5%、58.8%、28.7%）に近似している（総務省「国勢調査 人口等基本集計」（2015年））。

90年代前半に20～30歳代の子育て世代が転入し同市人口は増加したが、その後は転入の減少で転出超過に陥っている。少子化も相まって市人口は2015年現在の5.7万人から2040年には4.5～4.7万人へと減少すると予測されている（桜井市「人口ビジョン」）。

同市は、大阪市や香芝市等へは転出超過となる一方、宇陀市や吉野町等の東南部地域からは転入超過となっており、東南部地域から転出する人々の受け皿となっている一面もある。

II 桜井市の総合戦略の概要

こうした中、同市は2015年10月に「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、4つの基本目標（下表）を定めた。以下、その実現に向けて同市が重点的に進める取組みを紹介する。

4つの基本目標	
基本目標1：若者の働く場を確保する	若者の働く場を確保することによって、流出抑制とU・I・Jターンを促します。
基本目標2：市外からの来訪を促し、定住を促進する	歴史文化の発祥の地「桜井」の魅力を知ることによって、市外からの来訪を促し、交流人口の拡大や転入人口の増加につなげます。
基本目標3：子育て世代に選ばれるまちをつくる	子育て世代の男女両方に対するサポートを行うことによって、若い世代の結婚・出産・子育ての支援体制を向上させます。
基本目標4：桜井ならではの生活スタイルを確立する	豊かな自然環境に恵まれた「桜井」で、ゆったりとした時間を送る生活の魅力を向上させ、移住・定住を促進します。 また、桜井市の特性を踏まえ、魅力と個性を活かし、安心・安全に暮らせるまちをつくりまします。

III 桜井市が重点的に進める取組み

■奈良県との協働によるまちづくり

市は2014年12月、県との間で県内3例目となる「まちづくりに関する包括協定」を締結した。これにより、以下5つの地区において、県道の整備や県有施設の譲受等で県から支援を受けながらまちづくりに取り組んでいる。

(1) 中和幹線^{おおどの}栗殿^{おおどの}近隣周辺地区

2016年8月、中和幹線沿いの栗殿に、旧奈良県桜井総合庁舎を改修した桜井市保健福祉センター「陽だまり」が開所した。同センターは、これまで市内各所に分散していた「健康・子育て・医療・福祉」を集約。救急医療体制を充実させ平日夜間・休日の診療に対応する他、地域包括ケアシステム構築を実施する新拠点である。

最大の特徴は、「子育て総合支援室」として子育てに関するワンストップ相談支援窓口を設けたこと。担当課と保健師や保育士等の専門家が連携して、妊娠から出産、子育てまで切れ目なくサポートし、安心して子育てできる環境を整えている。

また、旧奈良県桜井土木事務所は地域防災の拠点施設として改修され、桜井消防署が移転し、本年1月19日から運用開始されている。



健康・子育て・医療・福祉の中心拠点「陽だまり」

(2) 大神神社^{おおみわ}参道^{おみわ}周辺地区

三輪山をご神体とする大神神社は日本最古級の神社として有名で、年間約600万人が訪れる代表的な観光資源の一つである。それだけに、参道沿いにもっと賑わいをと願う参拝者も少なくない。

市は、大鳥居から二の鳥居に至る参道を「大鳥居ゲートウェイゾーン」「まちなか交流ゾーン」「境内へのエントランスゾーン」の3つに分け、

休憩施設の確保や店舗誘致等、各ゾーンにふさわしい景観・空間づくりを行い、沿道に賑わいをもたらそうとしている。

(3) 近鉄大福駅周辺地区



大神神社の大鳥居と参道

近鉄大阪線大福駅

の徒歩圏内に所在する同地区は、多世代が居住し市内で最も高齢化率が低い地区の一つである。人口減少に歯止めをかける可能性のある地区として、市は同地区への居住を推進している。安心して子どもを外で遊ばせられるよう、住宅地内を外部の車が通過しない空間づくりに力を入れるとともに、バス等の公共交通を充実させ歩いて暮らせるまちづくりに力を入れる。

また同地区では県が「県営住宅桜井団地」の建替を検討していることから、市は住宅集約によって生まれる余剰地を活用し、子育て支援施設や医療施設、高齢者福祉施設等の地域コミュニティ拠点を整備すべく検討を進めている。

(4) 桜井駅周辺地区

古くは伊勢街道（初瀬街道）の宿場町として栄えた同地区。中でも「本町通り商店街」は、かつては奈良県三大商店街の一つに数えられるほど活気ある商店街だったが、行政機関の移転や商業施設の郊外出店が進み、現在ではシャッターを閉めた商店が目立つ。近年には駅前再開発ビル「エルト桜井」からスーパーが撤退する等、状況は厳しさを増している。

こうした中、県・地元企業・自治協議会・教育機関等で構成される「桜井駅南口エリア（周辺）まちづくり検討会」が2015年7月に発足。同検討会は、9月に「桜井駅南口エリアの将来ビジョン」をまとめ、エルト桜井を含む駅南口エリアの公共空間のあり方や、本町通沿いの空き町家・空き店舗の活用方法、駅前通りや伊勢街道沿いの景

観のあり方等について提言している。

これを受けて、同市はエルト桜井内に新たな人の流れを生み出し、付近に賑わいをもたらすような公共空間の構築を検討している。また、街道沿いの町家等、地域資源を活かした景観形成により、同地区の活性化につなげる方針である。



本町通のまちなみ

(5) 長谷寺門前町周辺地区

奈良時代の創建と伝わる総本山長谷寺は、古くから多くの人々の崇敬を集め、桜井市を代表する観光資源の一つである。しかし高齢化の進展に伴い、門前町には空き町家や空き地が増加している。

市はかねてから地元自治会や観光協会、旅館組合、NPO等とともに「初瀬門前町景観まちづくりの会」を発足、まちの活性化を図っている。今後、県からの支援を受けながら参道・小道の整備や電柱の移設、町家外観の補修等を行い、まちの魅力を高めて来訪者を呼び込むとともに、定住希望者と町家所有者とのマッチング支援を行うこととしている。また、自動車で混み合う参道に対する交通規制の実施検討や、渋滞緩和につながる白河バイパス（県道桜井都祁線）全面開通に向けて県への要請を進めている。



長谷寺門前町のまちなみ

■「多極ネットワーク型」まちづくり

市は一連の取組みを通じて、「多極ネットワーク型（一極集中でない）」まちづくりを目指している。

市街地においては、中心市街地の空洞化を防ぐ手法の一つとして2014年8月に設けられた国の「立地適正化計画制度」を利用し、「ネットワーク型コンパクトシティ推進事業」に取り組む。市が策定を目指す「桜井市立地適正化計画（素案）」では、桜井駅周辺及び粟殿周辺を「中核拠点」として商業施設や行政等の都市機能を集積し、多世代居住が実現している大福地区を「地域拠点」として住居等地域コミュニティ機能を集積することを企図。その他市内各地区に「観光拠点」や「サブ拠点」を設定して機能を集約し、市街地の過度な郊外化を抑制するとともに、鉄道や路線バス等の交通ネットワークで各拠点を繋ぐ。

一方、過疎化の進む中山間地においては、「小さな拠点」づくりを進めることでコミュニティの維持・活性化を目指す。各拠点と市街地とを、コミュニティバスやデマンドタクシー等の交通ネットワークで繋ぎ、日常生活の維持を企図する。

■まきむくの纏向遺跡等の整備

1971年に発掘調査が開始された纏向遺跡は、2009年に大型建物跡が出土したことで、邪馬台国畿内説における有力候補地として近年大きな注目を集めている遺跡である。

同市は2012年に研究機関として「纏向学研究センター」を設立する等、かねてから遺跡の調査研究に努めている。翌2013年には一部が国史跡に指定されているが、来訪者の高い関心に比して、現地の整備はまだ追い付いていない面がある。

こうした中、同市は史跡用地の公有地化を進め、史跡の保護を図るとともに遺跡見学の拠点としての公園広場や交流館等を整備する計画を進めている。纏向遺跡のみならず、大神神社や山の辺の道等へも来訪者を誘導すべく、観光拠点としてふさ

わしい整備を進めていく考えである。

■おもてなし環境の充実・地場産品ブランド化

このように歴史文化資源に恵まれた同市では、近年来訪者の増加が見られ、この流れを地元経済の好循環につなげるべく以下の取組みに力を入れている。

2015年9月、来訪者に対するおもてなし環境の充実を図るため、市は観光関連事業者、商工会、観光協会等と連携・協力して「桜井市おもてなし仕組みづくり協議会」を発足させた。体験メニューの開発やサービス向上のための研修会・講習会の開催等に「オール桜井」で取組み、満足度を高めることでリピーターの増加を目指す。

さらに市は地域ブランド「大和さくらいブランド」を立ち上げ、2016年より順次「名物みむろ（もなか）」や「柿の葉すし山の辺」、「三輪素麺」、「戎春雨」等をブランドに認定。市はこれら地場産品を「桜井の定番土産」として来訪者に提案し、イメージアップや購入増加に繋げたいとしている。



纏向遺跡全景（左）



「大和さくらいブランド」ロゴマーク（右）

桜井市は、ロードサイドや住宅地、中心市街地、観光地、中山間地と多様な地域を抱えているため、まちづくりの方向性は地域によりおのずと異なる。しかし「新しい人の流れ」を生み出しまちの賑わいをつくる、という点で市の姿勢は一貫している。

中心市街地の賑わいづくりや地場産業の活性化等、桜井市が抱える課題は奈良県全体の課題の縮図でもある。同市のまちづくりが、県全体の課題解決に寄与することが期待される。

（太田宜志、丸尾尚史）